

## 白川静のことば

《31》



金子都美絵・画

聖人というのは神の声を聞きうる人である。「見」が物の本質を見通すのと同じように、「聴」は神の声を聞きわけることです。そういう能力は、盲目の人に多くて、神賢しんけんとよばれた。神賢は聖人であったのです。聖人というのは、神の声を聞くことのできる耳みみ聴き人きこひをいうのです。

ここで口くちについて、少し述べておきます。人体に関する文字の中で、口耳の口は出てこないのです。これはふしぎなことなのですが、人間の口は神と交通する手段ではなかったのでしょうか。「鳴」は鳥が口をあけて鳴くようにみえますが、祝詞の前に鳥をおいて、その鳴きかたでトイをするもので、「唐書」経籍志にみえる「風角鳥情」二巻・「鳥情占」一巻・「鳥情逆占」一巻は、その古法を伝えたものであると思う。「唯」が唯諾の意であるのも、鳥占いへんの法を示すもので、もし祝詞の口くちに蟲むしをなす虫がついていると「雖いへんも」となり、停止条件がつくことになります。人が口を開くときには、人体をそえて欠の形となる。歌う・嘆くなどの欠は、人が口を開く形です。口耳の口は甲骨、金文には、口の形では出てこないのです。これは見・聴などが、すべて神秘的、神々の世界と交通する方法であったということから考えると、意味深いことのように思われます。人間の口は、神聖なものにあずかり得なかったということではないかと思うのです。

